

# シンハラ文字

野口 忠司

シンハラ文字の起源を遡ると紀元前3世紀頃と推定される最古の記録、トーニガラ（島の北西部の地名）碑文に刻まれたブラーフミー文字にまずその手掛かりを得ることができます。更に現存する碑文の多くから、王や富裕者たちが仏教教団と寺院に貯水池や石窟を寄進したことを記録した簡潔な字体の数々が解読されるようになりました。文字は左から右へ、そして稀に右から左へと刻まれていたことも同時に明らかにされています。刻字は地域差があるのが普通です。

紀元前6世紀頃から紀元後11世紀頃までインド各地の民衆の間で使用された中期インド・アーリア語族のブラークリット語と古代シンハラ語は深く係わっていたと考えられます。このブラークリットの中で最も高尚かつ代表的な言語と称されるマハーラーシュトラ語を筆頭にシュラセーナ語、古代マガダ語（12世紀以降パーリ語と呼ばれる）、ピシャーチャ語そして南インドのドラヴィダ語族のタミル語などから音素や文字に至るまでこうした言語の特徴が混交し用いられるようになったのです。

表音文字の多くは縦・横の線からなり硬い岩肌に刻字するには打って付けのものでした。しかし口誦されてきた莫大な仏陀の教えを後世に伝える上で、『教典』として保存する必要にいつしか迫られたのです。そこで古代シンハラ人仏教徒はパピルス紙にヒントを得たのか、豊富なパルミラ椰子の葉を蒸し天日で乾燥させ、これをなめしたプスコラ（貝葉）の利用を編み出したのです。素材自体が荒い繊維質ですから鉄筆で直線文字を刻字するさい切れが生じたのです。この弱点を補う過程でシンハラ文字はインド諸語の文字と異なり急速に丸味を帯び、その後独自の文字形体を経て遂に今日使用されている丸々としたシンハラ文字が誕生したのです。

「シンハラ」という語の意味は「ライオン／獅子」です。元来サンスクリット語の「シンハ」とパーリ語の「シーハ」が異化したものです。この国には釈迦族と獅子族という祖先を有したと語り継がれる建国神話が残っています。この視点からとらえると他の言語で同義の＜獅子＞を意味する＜シンハ＞とは異なった、愛着と威厳をもった受け止め方をシンハラ人がしていることが推し量れるのです。古くからシンハラ語は口語と文語で大きな差異を有しつつ発展した言語です。特に文語における仏教関連の用語はパーリ語、古典文学の領域ではサンスクリット語が幅をきかしていました。これらの分野に造詣の深い僧侶たちが知識層として権威を鼓舞する風潮が脈々と続きました。19世紀末期、印刷技術が普及し始めると言語の平易化が加速し平民知識層との格差が狭まりました。

今日スリランカにはシンハラ語とタミル語の2つの公用語があります。推計総人口1850万人のうち約74%を占めるシンハラ人が数字の上でシンハラ語とシンハラ文字を使用していることとなります。ただし都市部を中心に主に英語を使用する人口も相当数含まれています。

下記の例は挨拶のこぼ「こんにちは」を文字で表現した場合です。

ආයුබෝවන්      āyubōvan      （アーユボーワン）

この語は「長生きされますように」という祈願の意が込められていますが、朝昼晩、人に会うときや別れ際などに気楽に使えます。

数字は現在算用数字が使われています。

## [参考文献]

- 野口忠司「海外事情」、拓殖大学海外事業研究所、pp.76 - 84, 1983.12.
- 野口忠司『シンハラ語の入門』（1984）、『シンハラ語辞典』（1992）、『日本語 - シンハラ語辞典』（1998）、大学書林。

（町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社2001, pp. 178-179より転載）